Un roseau（アン ロゾ）

総合教育科目ガイドブック

No.15

タイトル“Un roseau（アン ロゾ）”
―― 一本の葦 ―― について

B.Pascal（1623－1662）は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
（ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリュ・フェーブル・ドゥ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン）

―― 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。――

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える（思考する、思想する）という行為によって有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、
その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだと。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

グローカル人材のすすめ

副学長　桐山 孝信

一　グローカル人材育成元年

「グローカル」という言葉を知っていますか。「グローバル」と「ローカル」を合わせた言葉で、二五年ほど前から、さまざまな意味で使われ始めた言葉のようです。そして大阪市立大学も「グローカル大学」ということができます。本学は、「都市・大阪を背景とした市民の大学という理念に立脚し、人類の幸福と発展に貢献し、さまざまな分野で指導的な役割を果たし、社会で活躍する人材を育成する」という教育理念に立って教育を行ってきました。この理念は、市民の大学という意味で地域（ローカル）への貢献をはたす社会人を育成するという点と、それにとどまらず、人類の幸福や発展に貢献するグローバルな役割を果たす人材を育成するという意味をもつ点で「グローカル大学」ということができそうです。その意味では、本学はこれまでもグローカル人材を輩出してきたと言っていいでしょう。しかしこれまでは、主としてそれぞれの学部や大学院で工夫され実践されてきたのですが、全学として、つまりすべての市大生を対象にした取り組みは非常に少なく、最近ようやく全学的な取り組みとして考えられるようになってきました。その意味で私は、この二〇一四年度を本学の「グローカル人材育成元年」と名づけたいと思っています。

二　いまどきの市大生

グローカル人材について書く前に、二〇一〇年に

大学生活をスタートするにあたって

理学研究科・理学部　飯尾 英夫

〈自己紹介をかねて〉

新入生へのメッセージを書くことになったいま、45年前の自分を思い出す。その年、昭和44（1969）年は大学紛争が吹き荒れていて、東大入試が見送られた。東大を目指していた学生が代わりにどの大学に流れるか、情報が入り乱れた。入学して、9月の前期期末試験の初日に名古屋大学でも教養部キャンパスの建物がバリケードで封鎖された。それ以降、テストも授業もなくなった。いつ授業が再開されるかがわからず、毎日大学から離れるわけにはいかなかった。同年12月に愛知県警機動隊が学内に入り封鎖が解除された。3ヶ月近く授業がなかったわけで、超法規的に単位認定が行われたと記憶している。

当時は、専門学部生になるまでの2年間、教養部に所属し一般教育科目を中心に学習することになっていた。英語8単位、第2外国語8単位のほか、人文科学科目12単位、社会科学科目12単位、自然科学科目12単位以上、と体育実技が必修となっていた。

英語は世界共通語となり特に重要。大学教員となり、高校生相手に話しかける機会も多く、いつも強調している。いまのうちに英単語の語彙を飛躍的に増やすことが肝要だ。文献を辞書無しで読めるようにならなくては、仕事として使えない。化学

本学でとったアンケートのデータをみてみましょう。それは、新入生と在学生に「市大に対するイメージ（複数回答）」を聞いたものです（図1）。新入生も在学生もともに「庶民的」が第一位ですが、前者が三三％ほどなのに対して、後者はなんと六五％にもはねあがっています。そして、新入生では五位であった「地味」が、二位の五三％を占めるようになっています。さらに「まじめ」という回答も倍近くに増え、「明るい」や「都会的」という回答が減少しています。

在学生の回答は、同じ年に高校や予備校で行ったヒアリング、そして市大教員からみた市大生像と共通していました。市大は「庶民的」な大学であり、学生は「おとなしくてまじめ」なのです。しかしそれは決してマイナスイメージではありません。同じく在学生の大学への評価では、「本学で学べてよかった」との問いに、「そう思う」三六％、「どちらかというとそう思う」四二％のあわせて七八％、「本学を誇りに思う」も両方で六七％と、かなり高い評価がなされている。自分にあった大学、ということでしょう。残念なのは、「卒業後も同窓会等のイベントに参加する」と答えたのが三五％にとどまっていることです（図2）。

ところで、社会人として持っておくべき能力を表すものに、社会人基礎力という考え方があります。前に進みだす力や考え抜く力、さらにはチームで働く力といったもので、みなさんが社会に出て十分な活躍をするために必要な力のことです。その中でも、主体性や発信力が弱いというのは、市大生に限ったことではなく、新入社員が一般的に持たれている評価なので、それほど気にすることはないでしょうが（「今の若者は・・」はいつの時代も使われてきた言葉です！）、そうした弱みを克服する必要はあるでしょう。私は、市大の教育が社会人基礎力をつけるのに十分な貢献をしてきた歴史と伝統をもっていると自負しています。それをグローバル社会にも適合的にすることが求められていると思っています。

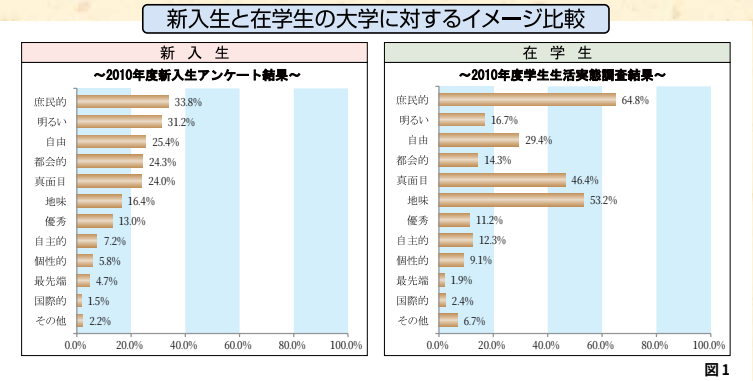

図1

三　先発隊としてのグローバル・コミュニケーションコース

先に挙げたアンケートにもあるように、ほとんどの学生が、市大を国際的な大学とイメージしていません。留学生は三〇〇人以上が在籍し、研究面でも世界的に注目されるものがあり、けっして国際性がないわけではありません。学生の皆さんが気づいていないという面もありますが、大学としてもこれまで以上に教育面でも国際性を伸ばす工夫をしようとしました。それが、二〇一三年度から開始された「グローバル・コミュニケーションコース（GCC）」です。

このコースは、外国語でのコミュニケーション力を強化し自国や異文化について理解を深め、人間と社会の多様性とそれにかかわって発生するさまざまな問題を理解・思索できる人材を養成するコースです。そのため、コース修了には、海外での語学研修を必修としています。またこのコースに登録した学生には海外研修費用の一部を大学が負担することも考えています。

の分野でも最近はドイツ語やフランス語での論文は見かけなくなり、新修外国語を学習する意味合いは変貌した。

１９９１年、大学設置基準の大綱化というのが決まって、各大学が独自に、より柔軟にカリキュラムを策定できるようになった。本学でもカリキュラムの見直しがあり、平成６（１９９４）年に教養課程改革があり今の全学共通科目の大枠がきまった。（詳しくは「全学共通科目シラバス・履修案内」を）。

〈知恵競べ〉

今の学生は内向き指向だとささやかれる。そうではないと思う。まだまだグローバル的に体験する機会が整備されていないだけだ。この点は、今後急速に変容するはずだ。

初めてのアメリカでの体験。先ず機内から目にした赤茶けた広大な大地、小麦かトウモロコシかの延々と続く耕地。外国にきたんだなーと感動する。本学に着任する前、ハーバードに2年間、１９９１年、レマン湖のほとりスイス・ローザンヌ（ＩＯＣの本部がある）に1年弱滞在し、研究にあけ暮れた。ボストンは文化都市、ローザンヌも風光明媚。息抜きするのにこれ以上の土地はない。ヨーロッパの冬期は概して暗い。でも、アルプスを千メートルあがれば快晴で雪山を楽しめる。レマン湖を船で対岸にわたればミネラルウォーターで名高いフランスの保養地エビアンなどなど。国外にでることでヒトとのコミュニケーション、語学力の大切さを痛切に体感する。グローバルに活躍できるように志したいものだ。

大学への入学、就職、そして結婚。人生のおおきな転機、今その一つを乗り越えようとしている。自分に欠けていたことを今一度振り返り、自己を改革するチャンスだ。これから生き抜く人生、健康にも留意しなければならない。特に健全なこころ。いつ誰にでも「大学にでてこられなくなる」魔物が潜んでいる。

アリ地獄にはまり込み、外が見えなくなり、穴の中で堂々巡りして抜け出せなくなり己を傷つける。一本の小枝を見つければ救いになるのだが…。クモが巣をはるのをみるのが好きだった。どこに構えるのかが、先ずポイント。1時間ほどかけ1メートルほどの巣が完成すると、中央に鎮座しじっと構え待ちの戦法。虫がかかると、巣を揺り動かし帰ってくる振動で判断する。出向いて、糸でぐるぐる巻きにする。すぐには食べない。また戻って鎮座。いたずらに、葉っぱを巣に投げかけてみる。巣をふるわせても振動が帰ってこないとわかると出動停止。冷静に判断する知恵者だと感心した。

〈災害への対策と備え〉

阪神間では、19年前の1月17日、阪神・淡路大震災で大きな被害を被った。その年、1月14、15日に大学入試センター試験が実施された。ズレていれば大混乱になっていたところ。本学でもこの年、震災被災者への入試特別枠が設置された。君たちは、この大震災が起こった前後にこの世に生まれてきたことでしょう。その後、この時の体験談に接する機会もあったでしょう。3年前の東日本大震災。ボランティアに参加した経験者もいることでしょう。そこで得た体験は、多くの局面でその人にとって生涯の糧になったはずです。

南海トラフ巨大地震。もういつ起こってもおかしくないと専門家は力説する。対策と備えは万全に、そのための生きる知恵を磨いておくのが肝要だ。

専門の授業を担当していて、クラスのデキが年度によってかわることに気づかされる。入学時の成績が年度によって大きく変わるとは思えない。クラスによく勉強するものが複数存在するか。学習習慣がない学生が多くいるかで、決まるみたいだ。この両極端の層の大小がクラス全体のデキにかかわると感じている。崇高なビジョンと高い志を持って、幅広い教養とともにその分野の専門家を目ざし

市大では、カレッジ・イングリッシュ（CE）という全学共通科目を一、二回生に提供しています。一回生には原則としてネイティブ教員が、「聞く・話す」を中心にして授業をすすめ、二回生は日本人教員が当たり、「読む・書く」に重点を置きます。二〇一四年度の新入生には、このCEクラス分けにあたって、全員にTOEFLを受験してもらい、英語力測定だけでなく英語学習への意欲を高めてもらいたいと考えています。さらに勉強をすすめたい学生のために、一段上の読み、書き、話す、の授業やTOEICやTOEFL対応授業を提供し、また大学が主催する海外語学研修なども行っていますので、GCCにかかわらずどんどんと勉強を進めていきましょう。

四　地域に根ざして　世界に羽ばたく　地域実践授業

大阪という地域は、少子高齢化社会の中で、商店街の活性化や地域福祉の向上、地域防災の強化をはじめ様々な課題を抱えています。こうした課題に取り組み、地域とともに解決を模索する行動力を持った学生を育てたいという観点から、二〇一四年度から全学共通教育科目に「地域実践演習」が開講されることになりました。学内で地域課題の講義を受けるだけでなく、積極的に地域に入って行って、解決されるべき課題は何かを、住民、教員とともに考えようとする、地域再生（CR）副専攻コースを予定しています。

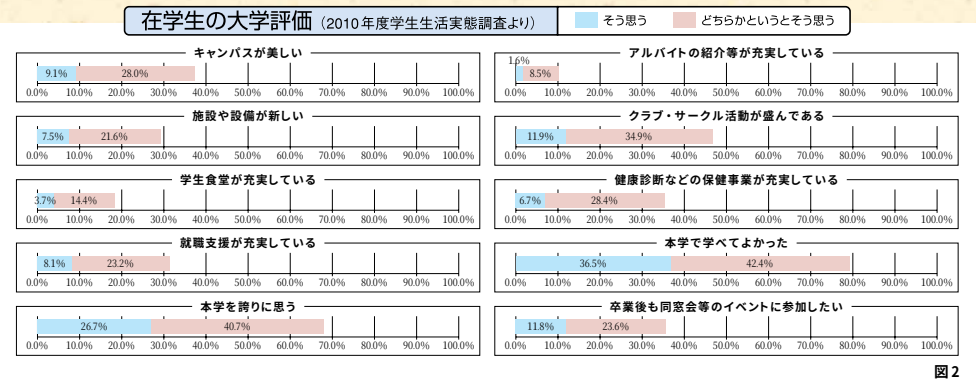

図2

これは、先に言及した社会人基礎力の充実に直結するだけではありません。地域課題は地域で終わるのではなく、地球的規模での問題と密接に関連しているのです。中国でのPM2.5の被害が日本にも直接及んでいることを考えればたちどころに分かるはずです。しっかりと地に足をつけて具体的な課題に向き合うことが、グローバルな課題にも果敢にチャレンジする力を身につけることができると考えています。

五　おわりに

いま、GCCとCRという新たなコースの設置により、すべての市大生が、グローバルだけでもなくローカルだけでもない「グローカル」な市民となるように、市大の伝統を生かしつつ新たな社会の変化にも耐える人材育成の革新に挑もうとしています。大学から発信する情報に耳を傾けておいてください。ともに学び成長していきましょう。有意義な学生生活を送られることを期待しています。

桐山 孝信（きりやま たかのぶ）
1958年生まれ
京都大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学（1986年）。現在、理事兼副学長
専攻分野／国際法学
担当科目／法と社会

てほしい。では、幅広い教養とは何だろう。一つだけ例示しよう。新聞で、毎日のようにサプリメントやいわゆるトクホ（特定保健用食品）の広告（それも全面の）を目にする。何を基準にヒトは商品を購入するのだろうか。自分のことをどれだけ知っているか、理解しているか。その商品への知識。効用は本当にあるのか、自分に向いているのか。総合的で、深遠な判断が必要だ。

〈社会環境の変貌と個人〉

ヒトは自然をまだ理解しきれていない。DNAの化学構造の発見から50年で、ヒトゲノムの全塩基配列を10年ほど前に解明した。コンピュータの進歩がとくに目覚ましい。科学の急速な進歩はコンピュータ技術の発達によるところが大きい。パソコンが普及しだしてからまだ30年ほど。40年、50年先の世界を予見することは困難だ。原発の安全神話は崩壊し、大きな負の遺産を残した。いつか誰かが処分するだろうと傍観するのではなく、継続的に関心を持ち英知を集結して解決しなければならない。

毎年10月の第1週はNobel賞受賞の発表がありワクワクする。その研究業績をみると、受賞タイプに二通りある。Nobel賞を目標にめざしてたどり着く受賞。誰も到達していないことを真摯に取り組み、ブレークスルーを達成して得た評価。いずれにせよ敬畏に値する。

〈最後に〉

総合教育科目B科目群「自然と人間」について触れる。「自然と人間」の主題は「現代の自然科学」と「自然科学と人間」からなる。前者では自然科学各分野の概要を学習する。文系学部学生に開講。後者は、理系学生を含め全学の学生を対象。自然科学とヒトとの関わりを見つめる科目だ。理学博士に該当する言葉として英語ではPh.D.（Doctor of Philosophy）を使っているゆえんでもある。この科目群で提供される特にユニークな科目をつぎに紹介する。ともに演習科目であり、講義室からはなれて受講するのも楽しいと評判だ。

・「実験で知る自然の世界」（文系学生対象）

「文系でも理系の実験ができることを知り、理系の視点を身につけたいと思った」「文系という枠組みにとらわれることなく、授業を受けようと思った」「ふだん実験などする機会がないので、興味を持って行えた」「文系学部の授業では体験できない貴重な実験をたくさんできて充実した授業でした」　以上は、受講生の声。「DNAとRNAの抽出」「楽器と声の音波」「生物発光と化学発光」「シャボン玉の科学」「空中写真から読み取る活断層」等などのテーマがあり、数学を含め物理、化学、生物学、地球学の実験／実習を体験する。詳しくは「全学共通科目シラバス・履修案内（平成26年度）」

・「植物と人間　演習」（全学学生対象）

大阪府交野市にある理学部付属植物園で実施される。夏期の研修期間中に、集中で実施される演習科目。この付属植物園は本学のユニークな研究施設であり、園内に植栽されている植物の観察を通じて、植物の多様性を体験的に学ぶ。

論理的な考え方、捉え方、さらに倫理観を高めることが要請されている。夢をめざして、さらに難局に直面した時に糧となるように受講科目を選び、大学生活のスタートだ。

飯尾 英夫（いいお ひでお）
1950年生まれ
名古屋大学大学院農学研究科後期博士課程修了（1978年）農学博士
現在　理学研究科教授
専攻分野／有機化学
全学共通教育の担当科目／基礎有機化学Ⅱ